

第174回山口西田読書会（2018年5月26日）

前回（第173回、2018年5月19日）のプロトコル

前半 唐露さんの報告

○前回の哲学的問い

- ・日々時間に追われると、内面的時に気づかないのではないか。
- ・内面的時に向かうと不安がないが、そうでないと不安が生じる。不安があることを当たり前と思えば不安がなくなる。

○本文要約

- ・感覚（意識）の根柢には無限なるものが働きつつある。
- ・反省によって知的対象界に持ち来し得るもの（意識の範囲、本能、物力）は既に対象化されたものであるのに対して、意識の根柢における無限なるものはその背後に永遠に働きつつあるもの、永遠の現在、反省（知識の立場）によって達することができない深き奥底である。
- ・我々は直観の立場において、自己の人格的歴史を構成し、さらに進んで客観的歴史をも構成する。ゆえにこの立場（時のない立場）において、我々が過去を想起するというのは過去を直観するのである。

○哲学的問い

- ・『直接に与えられるもの』における無限に働きつつあるもの自己発展と『善の研究』における実在の分化発展とはだいたい同じであるのか、そうでないなら、両者はどんな関係にあるのか、という問いについて考察した。
- ・純粹経験の立場から同じことを説明しているのではないかと意見があった。
- ・発問者は、西田の「対立しているものを内につつむ」に着目し、「つつむ」が意味することについて考察した。
- ・佐野先生から、意志（直観）→知識（思惟我）→意志（直観）と戻ってくるので包んでいるように見えるのではないか。また、言葉はその人の体験が背景にあって使われることがある旨の助言があった。

後半 テキスト「直接に与えられるもの」36頁3行目～37頁2行目（最後まで）

- ・「記憶の内容は既に意志のアプリオリの参加によって成り立つ事実の知識」について、現在の立場から記憶が構成される。
- ・「自己は繰り返すことができない」について、肉を美味いと食べる経験は一度きりであり、主客合一だから時は繰り返すことはできない。主と客が離れると、記憶を構成することにより「之を繰り返し得る」。

哲学的問い

- ・深い悲しみは無の境地や悟りに達しない限り克服できないのか。
- ・「今」に集中することで深い悲しみを超えることができるのか。